

親戚のものからこの五輪さんをお祭りして信仰すれば、森
氣交難から逃れ一家無事息災せよから言う通りにお祭りし
て信仰しておる」といつていた。又この五輪さん七
百年程前のお方で、何でも大変なお偉い方でその方の奥
方がけらい(臣)か、ともかく関係のある人達じゃつた相
なとつけ加えていた。

この塔は御影石で三基あり、中心を為す正面の塔は総
高一九二メートル、その左側のものはやや小さく総高一
〇二メートル、その後方にこれと同形のもの一基、これ
には空・月輪共に欠如してゐる。三基共文字は磨滅して
おる。この外二ツに折半された板碑が五輪塔の後側に
放置の状態に倒されてゐる。高(長さ)一・二三メートル
中・四二メートル厚さ〇・二六メートル、文字は磨滅し難
説。

私がまだ小学校の頃の鶴岡小学校校舎の敷地に有つ
てゐる部分日小山であつた。その一部分は墓地であつた。
そこにこの五輪塔があつたものを山を掘削した時、今の
処に移転された。五輪塔の下から、武器服飾品の類が發掘
され、それ等は皆移転先に埋葬されたと、何んでも偉い
人の墓だと聴かされたこととも覚えてゐる。五輪塔の形
式を石仏に對する参考書國辭等参照して見ると、鎌倉時
代のものに一番近似的な様に見える。

今年一月或る日再び現地を訪れた。既に五輪塔は取
われ、道路用地に開きくされてゐた。そこから西方一〇〇
メートル程行つた香通川堤防天端の片側に五輪塔は依然
放置の状態にされてあつた。

無縁墓地は無縁墓地有り丁重に取扱うべき筈。五輪
塔の直ぐ下の山際に在る墓地の一部が道路用地にかつ
た、その中に「日向中村高野産、朝日山門人一文字利吉
墓」というのがあつた。之等は他の墓石とともに適當の

処に移転復元されておる。然るに聖山に有つた五輪塔三
基及板碑に在りては、素人考へた常識からして一級庶
民の墓とはおのづからその趣きを異にし、曾て在りし日
且相当身分地位を有したる者か、その一族(主従)であ
つたことは想像に難くはない。この五輪塔だけがなぜ移
転復元することなく未だに路傍ならぬ堤頭片隅に放置さ
れなければならぬの左ろうかと、疑問と一抹の寂しさを
感ぜざるを得なかつた。

私は建設省ともあるものが墓地、墓石五輪塔の類は
如何ように取扱うものか、処理すべきものか位は百十承
知の筈、又是等墓塔の移転費支出の途もある筈だと思
ふのである。多分工事請負業者の仕業ではないかと想像
したくなる。それにしても監督指導の任にある建設省は
工事施行者即ち請負業者に對し適當なる処置を講ずべく
指示すべき筋合では無からうか。何れとも其れ墓地埋葬
地等に對する法律、全施行規則等の定める処により建設
省当局の責任に於いて善処され度いものである。

〔調査記録〕

矢野龍溪誕生地 石碑の文字

所在地 依田小学校共闘入口(城山登山口に近づくところ)

移転位置の誤りは空同史談二十六号(四三年三月号)指摘

〔正面〕

龍溪矢野先生誕生之地

舊藩主毛利公所賜之邸地也

先生祖父多門嚴父光儀之二

若居之先生因寄附以為本校
之屬地也矣

〔背記〕

碑面の文字破損甚だしく
業か著しく破損、中には
半つて判読出来ぬものと
あり、尚風化も進むこと
も隠り、一念に玉碎期
して撰録す。

〔右側面〕

明治四十五年一月 建設

清松・如藤・村松

(四四、四、六日記)